

慶應義塾大学学長 清家篤先生のお話から福澤諭吉先生の教えを学ぶ

開倫塾

塾長 林 明夫

1. おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。
2. 先週、帝国ホテルで読売国際経済懇話会(YIES)が開かれ、慶應義塾大学学長の清家篤先生からお話をお聞きしました。「高齢化と労働、社会保障」というお話で、非常に勉強になりました。「これから先は、豊かな高齢化社会を実現するために、豊かさを将来世代に伝える必要がある。将来世代の負担を軽くするために、言いにくい話ではあるが消費税などはやむを得ないのではないか。また、元気な高齢者を増やすためのいろいろな政策も必要である。何にも増して必要なのは、子育て支援、介護支援である。子育てについては今まで予算が少なかったのもっともっと予算をとって、働く女性の支援をする。そして、働きながら子育てができる社会にする。」という内容でした。働きながら子育てができないと、子供を産むという大変なことから遠ざかってしまいます。お父さん、お母さん、お爺ちゃん、お婆ちゃんなどの御家族で子供を育てることが基本ですが、それを社会が全面的にバックアップして、女性が職場で働くことを社会をあげて支援しなければ、これから先子供が少なくなり、高齢者の方が多くなるわけですから、社会を支えることはできません。同時に、60歳過ぎの方も70・80歳まで働ける社会、せめて70歳までは働ける社会をつくらなければならないと、それらの必要性を力説されました。
3. 私どもの開倫塾でも「85歳過ぎまで働ける職場づくり」を目指しています。何らかの形で85歳過ぎまで仕事をして、労働参加といいますか、社会参加をしていただきたいと思いますのですが、なかなか社会的にはなりません。
4. 最後に、清家篤先生は、慶應義塾の創設者である福澤諭吉先生がお話になった「奴雁(どがん)の視点」、「公知の判断」、「実学の根拠」について教えてくださいましたので、今日はそのお話を少しさせていただきます。
5. 福澤諭吉先生は、「奴雁」ということばをお使いになって、これからのリーダーの役割を表現なさいました。奴雁の奴はやっこさんの奴で、雁は鳥の雁です。雁の群れが一心に餌を啄(つい)ばんでいるときに、一羽だけ首を高く揚げて横・上・下などいろいろなところから危害を加えるもの、つまり難に備える雁を奴雁というそうです。ほかの雁は餌を食べているけれども、一羽だけは周り

を見回して様子をうかがい、群れを守る必要があるからです。学者の仕事はまさに奴雁のようなものであるが、社会のリーダーやグループのリーダーの方も同様に、ほかの人たちがご飯を食べているときもひとり遠くを見据えて現状を冷静に分析し、将来のために何が大切か・今なすべきことは何かを考えなければならない、せめてひとは奴雁の精神でいなければならないということです。

6. また、奴雁の立場では、公の知恵という意味の公知が判断をするときに大事です。ものごとが大切かそうでないか。軽いか重いか・大きい小さいかを見極めるギリギリの選択をするのが、公知の判断で、例えば、危ない敵がやってきたときに食べるのをやめて逃げようとギリギリの判断をするのが、奴雁の役割です。

7. では、判断をするときに何を根拠にするかということ、今までの経験や科学的なものごとの考え方という意味で実学を学んで判断の根拠にしたほうがよいということです。奴雁の視点・ものごとの見方で、公知・公の知恵の判断で、実学の根拠でもって判断をすることを、清家先生のお話は教えてくださいました。これからの少子高齢化社会を考える場合、今の豊かさを将来に伝えるため、また、将来世代の負担を軽くするために広く遠くを見据えて、これからの危険性は何かを考えてギリギリのところで公知の判断をする。その判断は今までの経験や科学的な考え方という意味での根拠です。このようなことがものごとの考え方の一つではないかということ、清家先生は教えてくださいました。放送をお聴きの皆さんも、お家の中でのリーダー、地域のリーダー、学校のリーダーといろいろなところでグループのリーダーをなさっている方がたくさんいると思いますので、是非、奴雁の視点で実学の根拠でもって公知の判断をすることを参考にいただければと思います。

8. 今日は、10月7日に行われた読売国際経済懇話会で慶應義塾大学の清家篤先生からお話をお聞きしましたので、「奴雁の精神」、「公知の判断」、「実学の根拠」についてお話をさせていただきました。皆さんはどのようにお考えでしょうか。